

「コンストラクティヴィズムとしての 第二次大戦のソ連の対日行動」

Constructivism and Japanese Northern Territories

恵木 徹待

Tetsunaga EKI

第二次大戦において米英ソは決して「連合」などしていなかった。東欧ではソ連が優位であったし、日本占領においては米国の一国支配と言っても良かった。ただ、連合してはいない同盟というのはパワーで反発することなく、お互いに譲歩しながら自らの国益を求めていったのではないか。ソ連の北方領土支配というのはまさにソ連と米英との譲歩から生まれたと考えている。しかもそこにあったのはパワーや地政学とは別の、ソ連のアイデンティティーや民族意識というコンストラクティヴィズム的な発想だと考えるのが妥当である。東欧で支配を強めたソ連が一方で対日占領では米国に押され、その妥協として先の戦争に始まる対日感情の克服を達成したのが北方領土の支配であったのである。そこに目を向けずには我が国は今後の北方領土返還への戦略を見誤っていくであろう。

キーワード：第二次世界大戦、ソ連、リアリズム、コンストラクティヴィズム、北方領土

1 はじめに

第二次世界大戦は連合国によるドイツと日本等との戦いという構図が定型化している。しかし、連合国の中でもいわゆる「三巨頭 (Allied Big Three)」と言われる米国、英国、ソ連は真に連合 (allied) していたのかも疑わしいし、まして二国間相互関係 (dual relationship) が成立していたのかといえそうでもない¹⁾。

もっとも、我が国はその連合国のその時々の重大な合意の不成立 (profound disagreements between the Allies) を日本の外交交渉戦術にとって有利に持っていきたいと希望していた²⁾ が、実際にはうまく行かなかったことは史実であろう。ただ、良いか悪いかの判断は別として、結果として日本はドイツのような「分断国家」にはならず、東京の「分割統治」は免れ、米国の占領下に置かれ戦後スタートさせた。また、思想分野でも戦後間もない頃はそれまでの帝国主義への抵抗として社会主義や共産主義が国内でも力もちはじめた³⁾ が、これも結果として日本は資本主義陣営としての戦後レジームが継続している。

1) The Rise and Fall of the Big Three. *History Review*, September 2005, p.1

2) "Peace Rumors Concerning Japan (U.S. collection)," in *Dai-ToA Senso kankei ikken- Joho shushu kankei.*"

3) *Ibid.*, p443

このことは米英という西側の二巨頭がソ連という一巨頭を抑え込んだと言えるのだろうか。また、ソ連が米英に譲歩したのか。

一説によれば、ソ連は「反ドイツ」感情よりも「反日」感情の方が強かったという⁴⁾。ではソ連はこの第二次世界大戦で日本から何を奪おうとしたのか。そしてそれを米英との関係上、いかに奪おうとしたのであろうか。平井は、「日本の打倒をソ連東部国境の安全保障という戦略的見地から正当化しようとした論説の横に、日露戦争以来の日本に対する『貸し』の清算というショーヴィニズムに訴えた論評が並べられていた」と紹介している⁵⁾(下線は恵木による)。

筆者は、当時ソ連が戦略的見地から日本への行動を決定していたことを否定するものではない。しかし、「ショーヴィニズム」という概念に興味を覚えるのである。そして本稿では、第二次大戦のソ連の対日行動を国際関係理論で説明を試みる時にどちらの論評で行う方が現在の我が国の状況に照らし合わせて妥当な説明ができるのかを追究したいと考えている。

因みに、筆者は第二次世界大戦におけるソ連の対日行動は上述したように「力」を重視するリアリズムの側面を否定しないまでも、国際関係の最新理論であるコンストラクティヴィズムで説明した方がより納得がいくと思っている。

兵頭は現在のプーチン政権はソ連時代へ逆行しているという論を提示している⁶⁾。プーチンがスターリンを信奉していることはよく知られている。2015年9月21日に開催された日露外相会談でラブロフ外相は「北方領土問題は協議しない。平和条約締結問題のみだ」、「日本が第二次大戦後の歴史の現実と国連憲章を受け入れることが問題の前進のために不可欠」と発言している⁷⁾。これまでの日露の北方領土交渉の流れを一気に覆すかのようなこのような強気な発言をみていると、兵頭の言うロシアのソ連返りが説得力を持つ。現代日露関係を分析する上でも、第二次大戦下のソ連の対日行動をコンストラクティヴィズムの視点から分析することは価値があると考えられる。

以下本稿では、第2章において、国際関係理論の中でも最も古いリアリズムと、最新のコンストラクティヴィズムの概略を押さえておきたいと思う。続く第3章でロシア(ソ連)外交の特徴を概観したい。そして第4章から同7章までの4章で、第二次世界大戦のソ連の行動を4つの分野(東欧情勢、対日占領、北方領土、不凍港の確保)から分析を行い、それぞれの行動はリアリズム的思考と、コンストラクティヴィズム的思考のどちらがより反映されているか明らかにしていきたい。最後に、最終章で特に北方領土分野ではコンストラクティヴィズム的説明の方が納得のいくこと、そしてそれはその他の分野とのつながりや経緯によって生まれてきたことなどの一定の結論を提示したいと思っている。

4) Edgar Snow, How Russia Will Fight Japan. The Saturday Evening Post, March 3 1945, p.15

5) 和田春樹「ソビエト連邦の対日政策」東京大学社会科学研究所編『戦後改革2 国際環境』東京大学出版会、1974、pp.47-49。

6) 兵頭長雄 「プーチン・メドベージェフ体制の発足と進むソ連時代への逆行」『東京経大会誌第262号』、2008、p.16。

7) 朝日新聞デジタル 2015年9月22日

2 リアリズムとコンストラクティヴィズム

本章では、後の章における分析の基準となる二つの国際関係理論の整理をまずしておきたい。

2-1 リアリズム

吉川・野口編による『国際関係理論』ではリアリズムという考え方は以下のような特徴を持つという⁸⁾。

- リアリズムとは国益やパワーから読み解こうとする理論であり、国家の安全保障を最も重要な国際問題であるとみている。
- 国家が安全を確保する方法は自立と同盟である。
- 「国策のためには手段を選ばないという非道徳的な考え」とか「好戦的な危険思想」としばしばみなされる。
- 軍備増強は他国に脅威を与えるもので、不安感を覚えた相手国は必然的に軍事力を増強する。しかし、相手国の軍拡に合わせて自らの軍備を整えることが、合理的な安全保障政策ということになる。

つまり、リアリズムの考え方とは、自らのパワーを最大化させ自国の安全保障の追求を第一に考え、その方法としては自らの力に頼るのか、他国との同盟を成立させるのか、である、しかも他国との軍備拡張も上記の目的のためにはやむをえない、と考える思考法であるということが言える。

2-2 コンストラクティヴィズム

コンストラクティヴィズムは1990年代より注目されてきた、国際関係理論の中でも新しい考え方である。コンストラクティヴィズムは、リアリズムと異なり、国際関係は物質的なものではなく、理念で構成されていると理解する⁹⁾。そしてその理念はアクターの共通理解によると説明する。

例えば、上述『国際関係理論』では興味深い例を示している¹⁰⁾。同じ核兵器の問題でも米国にとってイランは脅威で中国は非脅威であると認識されているのは、「両者の関係とそれに基づくアイデンティティー」の差によるのだと説明する。

では、例えば現在発生している南沙諸島沖における中国による人工島の建設に対する米国の反応や今後の行方はいかに説明が可能であろうか。リアリズム的概念を用いれば、中国のこのような人工領土や軍備の拡張はその同じ分だけ米国の中国に対する軍事力を増強させていく、一方で米国に人員的にも財政的にもその余裕がないなら弱腰外交に終わるであろう、と説明できるであろう。

8) 吉川直人、野口和彦編 『国際関係理論』、勁草書房、2015、p.154-159。

9) 同上、p.277。

10) 同上、p.275。

この問題をコンストラクティヴィズム的に説明をすれば、米国の行動が弱腰外交に見えるのは、上記のイランと中国の例と同じように、米国と中国が共有する理念（間主観性）に基づいて計算付くでなされていることであるとなる。

ゆえに、国際的な事象を見て、即座にこれはリアリズムののだとか、コンストラクティヴィズムののだとかという断言はできない。その周りにある軍事力や地政学的特徴はもとより、両者間関係やその国で共有されている社会的理念等にも十分配慮した上で、どの理論を使って説明するのかは各論者に任されるのである。

東郷は領土問題全般に関して、「領土問題が、単なる国際法の問題ではなく、ましてや、力関係を反映した利益の配分の問題でもなく、それぞれの国の歴史に密接に結び付いた問題、すなわち、『歴史的側面』をもつ」と主張している¹¹⁾。彼は更にロシアとの北方領土問題を指し、「この手の議論がでてくると、私はふつう、国際関係論で90年代から強い影響をもち始めた構成主義（コンストラクティビズム）を使って、あなたは力を信望するリアリズムに毒されている、人の世は力だけではない、民族とかアイデンティティとか歴史とか名誉とか、もっと大切なものもあるんだって論駁します」とコンストラクティヴィズムを援用している¹²⁾。

ただ、それはソ連の第二次世界大戦中の行動に対しても言えるのか、はたまた北方領土の問題に限られるのかももう少し精査していくが必要になると考える。次章ではロシア外交全般に関する特徴につきみていきたい。

3 ロシア外交

ロバート・カプランは、ロシアをヨーロッパにもアジアにも跨るが、どちらにも根をおろさないユーラシア主義であるとし、それは「ロシアの歴史的・地理的人格になじむ」という¹³⁾。1943年に発行された米国のサタデー・イーブニング・ポストにも同様の記述があり、更にソ連のアジアにおける領土はヨーロッパのその2倍はあり、ソ連のアジアにおける興味は米国や英国よりもはるかに大きかったと述べている¹⁴⁾。

進藤は「ソ連の占領初期の外交行動を分析する時、ソ連だけに焦点を当てるなら、いわゆる膨張主義外交の原型が見いだされていく」と述べる¹⁵⁾。そして、対独戦争終結時には「ロシアは、『ユーラシア大陸で競合する大国が一国もない』という状況となった」¹⁶⁾。

ちなみに、長勢は「ロシアのプーチン大統領はスターリンを偉大な指導者として尊敬しており、『ソ連崩壊は二〇世紀最大の地政学的悲劇』と公言して、ロシアの勢力圏の回復・拡大を目指す」という¹⁷⁾。そのプーチンの尊敬する「スターリンは何よりも地政学的利益を追求した

11) 東郷和彦、保坂正康 『日本の領土問題』、角川書店、2012、p.16。

12) 同上、p.154。

13) ロバート・カプラン、櫻井祐子訳 『逆襲の地政学』、朝日出版、2014、p.206。

14) The Saturday Evening Post, op. cit., 1943, p.92

15) 進藤榮一、『分割された領土』、岩波書店、2015、p.149。

16) マイケル・ドブズ、三浦元博訳 『ヤルタからヒロシマへ』白水社、2013、p.272。

17) 長勢了治 『シベリア抑留』、新潮選書、2015、p.57。

のであり、イデオロギーや革命的利益をその動機として認めることはできない。そしてこれはスターリン個人のみが抱いた動機ではなく、ソ連の政治・軍事エリートに広く共有されていた価値であった¹⁸⁾ という論者もいるが、これだけみれば、ロシア（ソ連）はリアリズム的な外交方針をとってきたと言える。

但しそのリアリズム的外交方針の中心にあるのは「多極主義世界の追求」である。「この考えに従えば、世界はアメリカという唯一の極（超大国）と、その他複数の極（国々）という構図で成り立つべきではなく、アメリカ、ヨーロッパ、アジアなど、複数の極から構成されるべきであり、ロシアは政治的にも経済的にもそれらの一つとしての機能を果たすべきであるということになる」と武田はいう¹⁹⁾。ロシアのこのような独特な多極主義は1990年代に外相と首相を務めたエヴゲニー・プリマコフ以降と武田は指摘するが、筆者は後述する第二次世界大戦時においても、そして現代においても通じると感じている。

反対に、金成浩は、「ソ連外交が、ヒトラーとおなじように世界支配を望む膨張主義であったと考えるのは無理がある」、「西側諸国から見れば、ソ連の国境隣接諸国への介入は『膨張』に見えた。しかし、ソ連側の認識を見る限り、『膨張』の意識よりも『防衛』の認識の方が強かったように見える」という論を展開している²⁰⁾。ジョージ・ケナンは、ロシアはかつてフィンランドを侵略して火傷をし、もうそれからはそのような戦争を望んでいない、という²¹⁾。デイヴィッド・ウルフもロシアのその領土的拡張政策が強調され「土地所有欲に駆られたように描かれることが多いが、綿密な分析はその単純さを否定する²²⁾」と指摘する。

ではこのような独特なロシア外交の源流には何があるのか。先のカプランはそれはロシア人の持つ「不安」であるという。「不安はロシア人の典型的な国民感情である」、「いいかえれば、ヨーロッパから極東まで続く、自然の境界がほとんどない真っ平らな地形と、過密都市とは対照的な過疎集落が、長い時間をかけて無政府状態の素地を形成していった。そこではあらゆる集団が、つねに不安を抱いていた」ともいう²³⁾。

小泉は、「外敵から身を守る自然の障碍をもたないソ連（あるいはロシア）は伝統的に安全保障上の劣等意識を有してきた」といい²⁴⁾、ソ連による東欧支配はこの劣等感の発動と克服という問題が密接に関わると指摘している。

そこで次にその、ソ連による東欧支配につきみていきたい。

4 東欧情勢

冒頭でも述べたように、米英ソという三巨頭は決して「連合」国ではなかった。このこ

18) 長谷川毅 『暗闘』、中央公論新社、2006、p.491。

19) 武田善憲 『ロシアの論理』、中公新書、2010、p.57。

20) 金成浩 「冷戦期ソ連外交における安全保障観と国境」、『ロシア史研究』第96号、2015、pp.59-60。

21) George F. Kennan, *Memoir 1925-1950*, Boston, 1972, p.361

22) デイヴィッド・ウルフ 「スターリン—『国境の男』」、『国際政治』第162号、2010、p.25。

23) ロバート・カプラン、前掲書、2014、p.188。

24) 小泉直美 「東欧の冷戦」『国際政治』第100号、1992、p.105。

とはある意味当然といえば当然のことである。同盟というのは国家が自らの安全保障を行う上での手段に過ぎないからである。ただ、こうした「仮面の同盟」の場合はお互いに譲歩をし合う関係となると筆者は考えている。本稿でも、この三巨頭がお互いどのような、そしてどのように譲歩を行ってきたのかを分析するのが最大の焦点である。

東欧における三巨頭の行動をみていく理由がここにある。後述するが、東欧における情勢と日本におけるそれとは関連していた。進藤は「東欧と極東、ルーマニア・ブルガリアと日本との、米ソ関係に描かれた外交上の取引である」といい²⁵⁾、同様に平井は、「いずれにせよ、東ヨーロッパと日本は米ソ対決の盤上の歩でしかなかった²⁶⁾」と指摘する。後の章でソ連の対日行動、特に北方領土に対する行動の分析のためにはまずヨーロッパでの経緯を明らかにしておきたい。

もともとソ連の関心はヨーロッパの戦場に集中していた。将来的にはバルカンと地中海におけるソ連勢力の拡大が次なる目標であった²⁷⁾。英国のチャーチルはポーランドを守るために単独で対独戦に参戦したと誇っていたが、その後「チャーチルは軍事力、したがって戦略の決定力がスターリンとルーズヴェルトに移ったことを、顧問たちの誰よりもよく理解していた」、そして「端的に言えば、米国が対ヒトラー戦の資金を出し、ロシアが戦闘のほとんどを行っていた²⁸⁾」のである。そしてポーランドに至っては連合国はソ連に「売り」、政体をソ連が望むままにさせてしまった²⁹⁾。

1943年のテヘラン会議では、三国の歩調を調整しようと試みるも、結果は東西両陣営の対立要因を造成するものであった。この会議で、既に暗黙の了解が成立し、フィンランド、ポーランド、チェコスロヴァキヤ、ハンガリー、ルーマニア、ユーゴスラヴィヤ及びブルガリヤは、これをソ連邦の勢力圏とし、これにたいしてギリシャ、イタリア、地中海、フランス及びスカンディナヴィア諸国は、イギリスとアメリカの特別勢力圏に入れることとなった³⁰⁾。

また、バルカン諸国においては、「英米ソ三大国の代表によって構成されるACC（連合国管理委員会）が占領管理を担っているが、事実上は議長であるソ連軍司令官が『まず行動し』、『その後で』英米の代表に情報が伝えられているという、そのような『みじめな地位』に英米側はおかれていた³¹⁾」。このように、東欧戦線を見れば、三巨頭ではなく、ソ連の一巨頭だったことがわかる。

「ロシアと西側連合国の関係はポツダム会談の直後、急激に悪化した³²⁾」と言われている。ソ連は戦後の日本の問題につき要求を出していくが、これを米国は拒否する。だからこそスター

25) 進藤、前掲書、p.165。

26) 平井友義「ソ連の初期対日占領構想」『国際政治』第85号、1987、p.16。

27) 小代有希子『1945 予定された敗戦』、人文書院、2015、p.143。

28) マイケル・ドブズ、前掲書、p.67。

29) 同書、p.138。

30) シューマン『ソ連邦の対内外政策』p437。

31) 豊下楯彦『日本占領管理体制の成立』、岩波書店、2012、p.207。

32) マイケル・ドブズ、前掲書、p.467。

リンは「東ヨーロッパ問題では『絶対に譲るな』と指示した」³³⁾ という。

一方で、「ポーランド、ブルガリア、ルーマニアなどでソ連の優越的地位を国際的に認知させることは、ソ連自身の安全保障コンプレックスを和らげることを意味した」と進藤はいう³⁴⁾。前章でみたように、ソ連が安全保障上抱えている「不安」や「脆弱性」の払拭に躍起であったことが窺える。

もう一つは、東欧へのソ連の関心には、当時ソ連ではウランがほとんどとれず、その供給地確保も東欧支配の目的の一つであったという事も指摘されている³⁵⁾。

松岡によれば、連合国内の協調体制が崩れ、国の態勢整備をしなければならなかったソ連指導部にとってはその最大のもは西側との間に緩衝地帯を設けてソ連の安全保障を確保するための東欧諸国の支配であった³⁶⁾。

5 東欧問題と対日問題の接点

米国からしてみれば、こうしたソ連による「東欧の完全な支配」に反対する一方で、「太平洋と日本の完全な支配」を維持することを目論んでいた³⁷⁾。一方でソ連にとっては、「東ヨーロッパにおける優越的地位は理論的には対日管理への参加の扉を開くための切り札ともなりえた」³⁸⁾。

このように、連合国内における不協和音は東欧や日本でそれぞれ存在しただけではなく、国際政治上はお互いが密接に結びついている。ただ、ソ連と米英は特にパワーがぶつかり合うことなく、妥協を探っていたように見える。例えば、ソ連が米国の、東欧と日本の占領における「ダブル・スタンダード」を鋭く批判し、ソ連は「日本問題」を1945年の秋から冬にかけて、東欧諸国の政権承認問題や講和問題に浮上させてくる³⁹⁾。一方でスターリンは、ブルガリアとルーマニアの政権の承認をソ連が米英から得るため日本における米国の支配権とギリシャ保守政権に対する英国の保護的地位を認めている⁴⁰⁾。米国も「ヨーロッパ問題でソ連に譲歩を求める以上、日本問題では反対にアメリカが譲歩しなければならないという反省も次第に出てきた」⁴¹⁾。このように、東欧問題は日本の問題でもあった。

しかし、そもそも連合国による日本の管理の在り方は東欧のそれらと比べてもかなり特殊な状況にあった。次章から連合国による対日行動に視点を戻して考察を続けたい。

33) 同書。

34) 進藤、前掲書、pp.152-153。

35) 下斗米伸夫 「スターリン批判の『地政学』」『ロシア・東欧研究』第35号、2006、p.8。

36) 松岡祥治郎 『アメリカの日本占領』創栄社／三省堂書店、2014、p.190。

37) 同書、p.336。

38) 平井、前掲書、p.16。

39) 豊下、前掲書、p.xi。

40) 松岡、前掲書、p.183。

41) 平井、前掲書、p.17。

6 対日戦と占領

6-1 対日戦

連合国による日本への軍事行動も当然のことながら「一致団結」したものではなかった。東欧におけるソ連と同様、太平洋戦争の負担は約4年間米国によって担われてきた⁴²⁾。ルーズヴェルトのスターリンへの考えは、「冷徹な政治的計算に基づいていた。すなわち、一人の独裁者を打倒するためには、もう一人の独裁者と同盟しなければならない⁴³⁾」ということであった。また、西側諸国の思惑としては、ソ連の東欧における勢力の拡大に不安を感じ、日本と闘わせることでソ連を弱体化させようという思いもあった⁴⁴⁾。

一方で、「ソ連の日本にたいする戦争の参加は、ファシズムと軍国主義にたいする連合国の戦いに同じ思いで参加したというより、むしろスターリン体制の残酷な政治の一環として捉えるべきであろう」と長谷川は言う⁴⁵⁾。「スターリンが第二次世界大戦での勝利の褒賞として欲しがっていたのは、東ヨーロッパだけではなかった。帝政時代の屈辱的敗北を是正する領土上の譲歩を日本と中国から引き出し、広大な帝国を東方へ拡張したがっていた⁴⁶⁾」。

この頃ある米国人記者は、アメリカとソ連が、日本を巡って競いあうことになるから、日本の敗戦後に訪れるであろう「太平洋と東アジアの平和」というのは、おそろしく脆弱で不安定なものに過ぎない、戦争の成り行きを決して楽観しないように、と述べている⁴⁷⁾。

ルーズヴェルトは「ロシアが対日戦争で同盟国になれば、その逆の場合に比べ、戦争はより短時間に、より少ない生命・資源の犠牲をもって終わらせることができる。仮に太平洋における戦争がロシア側の非友好的ないし否定的態度をもって遂行されねばならないとすれば、困難は測りがたく増大するであろう」とみていた。問題は、スターリンが対日参戦の代償としていかなる対価を要求するかである⁴⁸⁾、との懸念を表明している（下線は恵木による）。

ソ連は当時北海道上陸作戦まで考えていた。このソ連の北海道占領に関してはなぜ、延期、中止されたのか。恐らくその理由は、占守島における日本軍の想定外の反撃にたじろいだ⁴⁹⁾、あるいは南サハリン及びクリール列島作戦の遂行が阻害されるということの他に、連合国特に米国との関係を考慮せざるを得なかった⁵⁰⁾という分析もある。一方で、「ややもすると歴史家は、スターリンが北海道の北半分を分け前として要求したのは、クリールを手に入れるための交渉の駆け引きだったと解釈する傾向にある。しかしスターリンは本気で北海道の占領を計画して

42) 長谷川、前掲書、p.395。

43) マイケル・ドブズ、前掲書、p.31。

44) エレーナ・カタソワ、白井久也訳『関東軍兵士はなぜシベリアに抑留されたか』、社会評論社、2004、p.24。

45) 長谷川、前掲書、p.514。

46) マイケル・ドブズ、前掲書、p.95。

47) Demaree Bess, *What Is Our Future in Asia?*, The Reader's Digest, July 1944

48) マイケル・ドブズ、前掲書、p.32。

49) 上原卓『北海道を守った占守島の戦い』祥伝社新書、2013、p.5。

50) エレーナ・カタソワ、前掲書、p.34。

いた⁵¹⁾ という見解もある。松岡によれば米国は「極東について、早くも四五年四月の時点において、ソ連は満州北部だけでなく、全中国を意のままにすることを狙っていると断定するに至っていた」、「ソ連はアジア全域においてアメリカの利益を脅かすと認識していた⁵²⁾」。

結局日本はその後、ソ連参戦に加え、その前の広島、長崎への原爆投下によってポツダム宣言を受諾し連合国の占領下に入ることになる。

以上のように、連合国における対日軍事行動だけを個別に考察すれば、ソ連と米国による日本をめぐるパワーのぶつかり合いが生じ得る状態にあったと言える。しかし、「仮の同盟」である連合国はパワーの激突は生じなかった。その後の日本占領は東欧におけるやり方とはまったく異なるものであり、この辺りから連合国がパワーのぶつかり合いではない、駆引きのような動きが見られる。次章で更に詳しく考察していきたい。

6-2 占領体制

東欧における占領体制と異なり、連合国による対日占領には以下2つの特徴がある。一つ目は、「そもそも、ポツダム宣言や降伏文書といった日本降伏と占領を基礎付けた文書には、占領管理体制について何一つ規定されなかった⁵³⁾」点である。連合国最高司令官の権限については、イタリアには44条からなる休戦協定が、ルーマニアでも22条から成る休戦協定があり、ドイツでも「ドイツの最高権力の掌握」に関する宣言と8月2日のポツダム協定、そして9月20日の「ドイツに課される追加的要求」に関する四大国協定によって取り決められていた⁵⁴⁾。

もう一つ目は、占領体制の形態である。松岡によれば⁵⁵⁾、占領管理体制には、米英ソ対等管理のイーデン方式と、イタリアに適用された、連合国(米)だけが連合国管理委員会(ACC)において排他的な管理権を行使し、他の国(ソ連ほか)は諮問委員会で名目上の参加を認められる「イタリア方式」の他、ドイツのようなイーデン方式とイタリア方式の混合管理体制があった。ただ前述のように、このイタリア方式は、その後ソ連の東欧支配の下地を準備することになった。最初は44年9月ソ連軍に降伏したルーマニアにおいてであり、同年10月以降のブルガリア、翌年1月降伏のハンガリーと続いた。休戦協定によってこれらの国に設置された連合国管理委員会(ACC)ではソ連が実権をもち、米英代表の任務は本国との連絡に過ぎなかった⁵⁶⁾。

一方の日本において米国は上記のようなイーデン方式でもイタリア方式でもドイツ方式でもない、いわばマッカーサーによる「連合国の権威」に基づいたSCAP(連合国軍最高司令官)の存在そのものであった。ソ連も、日本には「他国の占領管理体制とは異なった「新しい概念の設定や手続き」が必要であろう」と考えてはいた⁵⁷⁾。

51) 長谷川、前掲書、p.464。

52) 松岡、前掲書、p.61。

53) 同書。

54) 豊下、前掲書、p.8。

55) 松岡、前掲書、p.59。

56) 同書。

57) 豊下、前掲書、p.207。

一方でソ連は東京に関し「ソ連占領区を設置してソ連軍をこの地区に配置することをも含んでいた。あきらかにスターリンは日本占領がドイツ占領と同じように行われることを予期していた。東京はベルリンのように米英中ソの四つの占領地区に分断されるべきであると考えていた」⁵⁸⁾のであろう。「ソ連は日本に軍隊を送り込みドイツで行ったように分割占領したかったのだけれども、自国の派遣軍がマッカーサーの指揮下に入るのを嫌ってこれを拒んだのである」⁵⁹⁾。

こうした背景にはトルーマンが、「ポツダムでスターリンの態度に強い印象を受けていたので、①日本にはドイツのような合同管理機関は置かないこと、②同盟国が占領部隊を派遣するにしても、それは統合米軍司令部の指揮下に置かれること、③別々の占領地域は設けないこと、これらについて断固たる決意をしていた」⁶⁰⁾ ことの影響は少なくはないであろう。

斎藤は、「占領期において、ソ連が対日政策の実現に失敗した理由としては、ソ連の対日政策の成否が米国占領政策の展開如何に大きくかかわっていたという“従属変数”的側面—これが最も重要な要因であった—の他に、日本人の反ソ・ナショナリズムおよび共産主義への不信感の存在、あるいは日本共産党に対する社会党などの信頼感の欠如、さらには、ソ連が対日政策を確実に実現させるために不可欠な効果的“切り札”を持っていなかったことなどが指摘される」⁶¹⁾ という。

一方で、マイケル・シャラーは「おそらくスターリンは、最初から日本をアメリカの勢力圏に任せていたのだ。極東での穏健さを示すことによって、ソ連の支配下のバルカン地域について、西側連合国に口出しさせない交渉材料を得たかったのである」⁶²⁾ と指摘している。前述したように、東欧と極東のいわゆる「バーター」という考えが既にあったのではないか。進藤も、「しかしそれにしても、スターリンであれモロトフであれ、ソ連の対日政策決定者たちはいったいなぜ、ソ連は日本に占領軍を送るべきではなく、日本はアメリカに任せべきだという“奇妙な”政策決定を進めたのだろうか。“奇妙な”というの、いわゆるソ連膨張主義、いや大国外交論の論理に従えば、そもそもソ連が対日占領に参加するために自国の軍隊を送らないと決定したこと自体、その論理ではとうてい理解しがたいことだからである」⁶³⁾ と疑問を投げかけている。

つまり、日本をめぐるのは米ソのパワーのぶつかり合いというよりもソ連の思惑に米国が影響を受けながらも日本は米国が主導で占領していきたいというある種の「妥協」が双方に見られる。「アメリカにとっては、スターリンが強調したところの、ソ連の対日参戦と極東・「旧日本領」におけるソ連軍の存在という東欧には見られない「独自性」の問題が、今後無視し得ぬ重要な問題となってくるのである」⁶⁴⁾。更には、「ソ連の軍事行動はアメリカ政府を憂慮させた。

58) 長谷川、前掲書、pp.459-460。

59) 進藤、前掲書、p.150。

60) 松岡、前掲書、p.63。

61) 斎藤元秀、「ソ連と占領下日本」『ソ連東欧学会年報』第16号、1987、p.114

62) マイケル・シャラー 五味俊樹訳 『アジアにおける冷戦の起源』木鐸社、1996。

63) 進藤、前掲書、p.161。

64) 豊下、前掲書、p.221。

ソ連の支配下に入ると認めていた満州と南サハリンについてはすでにあきらめていたが、大連、南朝鮮、クリール、北中国などの戦略的な地域についての帰属は依然、重要な関心事であった。アメリカ政府の課題は、日本の降伏を成しとげるといってもっとも重大な課題を、これらの戦略的地域へのソ連の膨張とバランスをとりながら達成しなければならないということであった⁶⁵⁾。

そして米ソ間の一番の「妥協」が北方領土をめぐる問題ではなかったのか。次章からは北方領土における対日行動に焦点を当てたい。

7 北方領土

1875年の千島・樺太交換条約（ロシアではサンクトペテルブルグ条約）で、ロシアは南サハリンを自国の領土とするのと引き換えに北クリールを日本に引渡し、クリールは日本の領土となった。また、「日露戦争（1904-1905年）の結果として1905年のポーツマス条約は、旧ロシア領の樺太全島のうち北緯50度以南を日本領とした。したがって、南樺太は戦争の結果として日本が獲得した領土であるが、千島列島は戦争によらず両国間の外交交渉によって日本の領土として確定したものである⁶⁶⁾。そのクリール諸島（千島列島）は「(何の理由づけも行われずに)「ソ連邦にひきわたされる」ことになった。サンフランシスコ講和条約第2条Cでも、「クリール諸島」と「日本国が1905年9月5日のポーツマス条約の結果として主権を獲得したサハリンの一部およびこれに近接する諸島」とを区別して列記した上で一括して「日本国は……に対するすべての権利、権原および請求権を放棄する」と表記されている⁶⁷⁾。

進藤は「千島は、旧敵国であるドイツと日本からの脅威に対処し、戦後アメリカ主導型の覇権秩序を構築し維持するための、戦略的拠点としての意味を併せもっていた」、その意味で千島列島は「米ソ共存体制をつくる“大同盟”のいわば絆としての意味を持っていたと言ってもよい⁶⁸⁾」と述べる。

しかし、なぜ結果的に米英が南樺太の「返還」だけでなく千島列島の「ひきわたし」までスターリンの要求に同意したのか。斎藤は、戦後の国際関係に対する配慮から意図的にスターリンの要求を承認した、とみるのが妥当であろう、と述べている⁶⁹⁾。

米国は「クリールとは手を切ったのである。アメリカはソ連のクリール侵攻にたいして手を抜いて見守ることにしたのである⁷⁰⁾。1945年2月のヤルタでは以下のような会話がなされている⁷¹⁾。

65) 長谷川、前掲書、p.436。

66) 斎藤稔「ソ連の対日参戦の背景とその結果」『経済志林』第61号3巻、1993、p.29

67) 同書、p.29-30。

68) 進藤、前掲書、p.156。

69) 斎藤稔、前掲書、p.30。

70) 長谷川、前掲書、p.470-471。

71) 半藤一利、『ソ連が満州に侵攻した夏』文春文庫、2015、p.174-175。

ルーズヴェルト

「南樺太と千島列島がソ連に引き渡されることについては、なんら問題はない」
スターリン

「私は日本がロシアから奪い取ったものを、返してもらうことだけを願っているのです」
ルーズヴェルト

「とられたものを取り返したいというのは、きわめて無理のない要求でしょうね。」

スターリンの日本に対する要望は、これまでに失った諸権益の復活だったのである⁷²⁾。

つまり、ソ連が前回の戦争で奪われた領土プラスアルファを獲得しようとしていた史実は明らかである。そしてそれを米国が認めていた上でのソ連対日参戦であった。

1945年9月2日にミズーリ号艦上で日本の降伏文書が調印されたが、「同じ日にスターリンは戦勝を祝うメッセージをラジオを通じて発表した。この演説は地政学とショーヴィニズムの奇妙なアマルガムであった。一方では日本の敗北によって南樺太と千島列島が「ソ連の側に移り、直接ソ連を外洋に結び付け、日本からの侵略の再発を防ぐ手段となった、と明快に割り切りながら、他方では対日戦の勝利が日露戦争におけるロシア軍の敗北に対する復讐であると言いつつ放っていた」⁷³⁾。

ここがまさに本稿の冒頭でも言及し、中心的課題になっている点である。このスターリンの発表はのちに9月15日付の日本兵向け宣伝紙「日本新聞」創刊号一面トップで訳出し以下のように掲載された⁷⁴⁾。

「一九〇四年日露戦争に於けるロシア軍の敗北は国民に苦しい記憶を残した、その敗北は我が国家の不名誉になった。我が国民は日本を撃破しその恥を拭う日が来ることを信じ、その日の来るのを待っていた。我々前世代の人間は四十年間その日の来るのを待っていたが今その日は来たのである」(下線は恵木による)

つまり、ソ連による樺太・千島の占領が先の戦争の復讐であることを公然と宣言したのである。これはまさにコンストラクティヴィズムのいうアイデンティティ、世論や歴史的側面が全面に出た政治的声明である。

ヤルタでは「ソ連は、対ドイツ戦勝利の3か月後、対日戦に加わることを条件に、極東で南樺太を取得すること、そして千島列島のうちの北千島4島、すなわち(占守島、幌筈島、温棚古丹島、捨子古丹島)を保障占領地域とすることになった⁷⁵⁾。また、残りの中千島と南千島は、アメリカの占領地域と決められていた」。「北千島を除いた千島列島をアメリカの軍事行動範囲

72) 同書、p.175。

73) 平井、前掲書、p.15。

74) 長勢、前掲書、p.83。

75) 上原、前掲書、p.80-81。

と認めていたのだが、それに反してソ連はアメリカの出方を窺いながら北千島以南への軍事行動を進めていった⁷⁶⁾。

もっとも、半藤は、ルーズヴェルトは「千島列島に日本固有の島が含まれているかどうかなど、どうでもいいことであったのかもしれない⁷⁷⁾、と米国の無知、無関心さをも指摘している。上述のとおり、仮の同盟の場合には一方に関心のないことであれば特に異議を申し立てることもないということの表れであろう。

勢力の分割圏として、「米国は原水爆の実験場としてのミクロネシアを排他的に確保する『代償』として、大西洋憲章やカイロ宣言で確認された『領土不拡大』の原則に背反する千島領有を認知するに至ったのである⁷⁸⁾。

このように特に北方領土をめぐるソ連の対日行動が決してリアリズム的ではないことは確認できる。ただ、ソ連は地政学的戦略として太平洋に通じる不凍港の確保を実際に望んでもいた。よって、結語に入るまえにこの点につき次章で考察したい。

8 不凍港の確保

進藤は、「千島列島は、琉球、小笠原など日本周辺の島々と共に、ソ連を含めた連合国が、戦後秩序のために“戦略的”に支配できる地位におかれるべきこと。何よりそれは、戦後世界の反ファシズム“民主主義”世界秩序の戦略的拠点として機能することが想定されている」と述べる⁷⁹⁾。しかし、果たしてそうであろうか。筆者は、まず「連合国としての戦略」、という文脈に異議を唱えざるを得ない。つまり、戦後、日本が再び米ソに対抗して北方から戦闘行為を開始するのを防ぐ、防波堤として米ソが極東を考えていなかったことはこれまで述べてきたことから明らかである。

ただ、「戦略」という意味で言えば「国土を守る海がないためにつねに満たされず、拡大を続けるか、逆に征服されるかのどちらかしかない⁸⁰⁾」という認識で外交政策を進めてきたソ連にとっては不凍港を欲していることは暗示されていた⁸¹⁾。

ソ連は「極東に不凍港がほしい」という具体的な政治的要求も出していた。ルーズヴェルトもこれに「大連港を自由港として使用しようとしたら如何」と答えているが、だれの口にも千島列島の名はのぼっていない。テヘラン会談の公式記録には千島のチの字もない⁸²⁾。ソ連は「テヘラン会談の際、大連の『取得』を提案していた⁸³⁾。

このように、ソ連は千島を戦略的要所と考えてはいなかったとまでは言えないが、やはり前

76) 長勢、前掲書、p.80。

77) 半藤、前掲書、p.177。

78) 豊下、前掲書、p.394。

79) 進藤、前掲書、p.155。

80) ロバート・カプラン、前掲書、p.183。

81) 平井、前掲書、p.9。

82) 半藤、前掲書、p.168。

83) 同書、p.11。

章で考察してきたこれまでの「復讐」として千島を取得してきたと考える方が自然ではないだろうか。

9 結語

以上、ここまで考察してきたように、ソ連は安全保障上抱えている不安や脆弱性を東欧では連合国の中でも思うがままに払拭し、逆に日本においてはほとんどの点で米国に譲歩をせざるを得ない状態であった。

ただ、それは決してソ連と米国がパワーを中心として争った結果ではなく、見せかけの「仮の」同盟国としての譲歩の仕合いだった。そしてソ連が日本において獲得した譲歩は先の戦闘で奪われた領土プラスアルファの獲得、つまり千島の占領であった。

このソ連の偏狭な愛国主義や民族主義を国際関係理論を使って説明を試みれば、やはりリアリズムとしての説明よりも、コンストラクティヴィズムによる方がしっくりいくと考える。

これは現在、そしてこれからの北方領土交渉を我が国が行う時、ロシアがパワーに基づくリアリズムでも、規範や国際的ルールに基づくリベラリズム的思考でもないものに基づき我が国に対応してきていることを知るためにも非常に重要な事実であるし、逆にそのどちらの思考でもないということは本北方領土問題の解決が他の領土問題に比べ非常に困難であることを示唆するものである。

今回は過去のソ連の我が国に対する行動分析を行うことまでしかできなかったが、今後の研究課題として、今回の考察結果を現在の日露領土交渉と絡め、更に研究を続けていきたいと考えている。

文献

上原卓 『北海道を守った占守島の戦い』、祥伝社新書、2013。

Edgar Snow, *How Russia Will Fight Japan*. The Saturday Evening Post, March 3 1945

エレナ・カタソワ、(白井久也訳) 『関東軍兵士はなぜシベリアに抑留されたか』、社会評論社、2004。

金成浩 「冷戦期ソ連外交における安全保障観と国境」、『ロシア史研究』、第96号、2015。

小泉直美 「東欧の冷戦」『国際政治』第100号、1992、p.104-125。

小代有希子 『1945 予定された敗戦』、人文書院、2015。

斎藤稔 「ソ連の対日参戦の背景とその結果」『経済志林』第61号3巻、1993、p.1-36。

斎藤元秀 「ソ連と占領下日本」『ソ連東欧学会年報』第16号、1987、p.108-114。

下斗米伸夫 「スターリン批判の『地政学』」『ロシア・東欧研究』第35号、2006、p.3-12。

George F. Kennan, *Memoir 1925-1950*, Boston, 1972.

進藤榮一 『分割された領土』、岩波書店、2015。

デイヴィッド・ウルフ 「スターリン—『国境の男』」、『国際政治』第162号、2010、p.24-39。

Demaree Bess, *What Is Our Future in Asia?*, July 1944.

武田善憲 『ロシアの論理』、中公新書、2010。

東郷和彦、保坂正康 『日本の領土問題』、角川書店、2012。

- 豊下楯彦 『日本占領管理体制の成立』、岩波書店、2012。
- 長勢了治 『シベリア抑留』、新潮選書、2015。
- 長谷川毅 『暗闘』、中央公論新社、2006。
- 半藤一利 『ソ連が満州に侵攻した夏』、文春文庫、2015。
- 兵頭長雄 「ブーチン・メドベージェフ体制の発足と進むソ連時代への逆行」『東京経大会誌』第262号、2008。
- 平井友義 「ソ連の初期対日占領構想」、『国際政治』第85号、1987、p.7-24。
- 松岡祥治郎 『アメリカの日本占領』、創栄社／三省堂書店、2014。
- 吉川直人、野口和彦編 『国際関係理論』、勁草書房、2015。
- Yukiko Koshiro, *Eurasian Eclipse: Japan's End Game in World War II. American History Review*, April 2004.
- マイケル・シャラー（五味俊樹訳）『アジアにおける冷戦の起源』、木鐸社、1996。
- マイケル・ドブズ（三浦元博訳）『ヤルタからヒロシマへ』、白水社、2013。
- The Rise and Fall of the Big Three. *History Review*, September 2005.
- ロバート・カプラン（櫻井祐子訳）『逆襲の地政学』、朝日出版、2014。
- 和田春樹 「ソビエト連邦の対日政策」東京大学社会科学研究所編『戦後改革 2 国際環境』、東京大学出版会、1974、p.47-49。

